森林レンジャーがゆく（110）

広葉樹林なら、草原なら…様々な蝶々

どんよりとした日々が続く梅雨の森の中は、吸い込まれるほどの湿度に圧倒されますが、この時期ならではの特徴的な生き物が活発になる頃です。

その中に、「ゼフィルス」と言われている宝石の様に輝く小さな蝶の仲間がいます。これらはミドリシジミという蝶の族で、実に美しく、特定の食草や環境との繋がりが強いという特徴があります。ゼフィルスの仲間は広葉樹林の樹種が食草であるため、豊かなブナやナラ林、または河川敷などの多様な雑木林に生息します。あきる野においてゼフィルスの仲間の多くは希少で、簡単に見つけることは難しいと思いますが、ありがたいことに、代表的なオオミドリシジミや、比較的見つけやすいウラゴマダラシジミは、ある程度会える機会があります。

夏から秋にかけて、河川敷や山の伐採地などに広がる草原でよく見かけるタテハチョウの仲間は印象的で、その中でも特にヒョウモンチョウという族が目立つと思います。ミドリヒョウモン、クモガタヒョウモンやツマグロヒョウモンなどは代表的で、オレンジ色の翅（はね）にヒョウ柄が特徴です。これらの蝶が草原などで、数多く舞いながら花の蜜を「吸い巡る」姿をずっと見ていると、何気なく人間の「はしご飲み」の行動に見えてくる賑（にぎ）やかさを感じます。

これらの蝶の一部が生息し、緑が多いあきる野市でさえも、山地の大部分はスギやヒノキの暗く、単調な人工林になっているため、今回紹介してきた蝶を含め、多くの生き物には適していない環境であるのが現実です。人工林は人間の生活のために管理されてきましたが、現在は全国の広い範囲で活用されていないため、生物多様性が低下しつつあります。その結果、絶滅危惧種の増加や野生動物による農業被害、花粉症といった健康被害などの問題に繋（つな）がっています。

活用しない人工林を多様な自然環境に変える壮大な取組が全国に広がる日が来ることを期待しながら、今の自然を見守り続けるしかないのでしょうか。と、想う日が多いこの頃です。（パブロ）

２０１５年、市内の山地で出会ったウラギンヒョウモン。都内では、ほとんど見られない蝶となっており、これまで確認したのは２回だけです。